

ヤスクニ・レポ 222

戦後73年とはどんな年か？

—改めて私たちの課題を問う—

代表 西川重則

1

私は改めて、いわゆる「二・二六事件」について学び今日の課題の重要性を痛感させられている。言うまでもなく、「二・二六事件」は、一九三六年二月二六日に、現在の皇居の近くで天皇の軍隊(陸軍)によって起こされ、戦後七三年の今日、私が愛読している須崎慎一著『二・二六事件』(岩波ブックレット シリーズ昭和史 No.2)のまとめのところに書かれているが、類似の厳しい状況を直視し、平和国家日本が戦争国家日本にならないよう祈り、具体的に私たちの課題を真剣に訴えたいと心から願っていることを最初に申しあげたい。著者のまとめは次の通りである。

「二・二六事件—それは大規模な侵略戦争へと、時計の針を大きくすすませ、日本国民に無謀な戦争を強要したのみならず、近隣諸国民に言語を絶する被害をあたえる第一歩となったのである」。

戦後七三年の二〇一八年の厳しい日本の状況を正確に認識することがどれほど重要であるかについて、私は毎月、講演を依頼され、訴え続けている。私は多くの市民運動にかかわっており、その市民運動を通して日本の厳しい状況を報告しているが、私の場合は、「朝日新聞」や「東京新聞」などに私のコメントが報告されており、お互いに直接知らない場合も新聞を通して、私のコメントの内容を知り、講演を依頼されている場合が多い昨今であ

る。今年も、遠方の地域にも呼ばれ、厳しい国会の現状を正確に報告し、そうして機会に直接学ばれた方々がその方の友人・知人に知らされ、講演の機会となっている。

今年も〈二・一一〉の二月を始め、三月、四月、五月と遠方の地域の私の講演が予定されている。

直接私の講演となっているが、ただ私の場合は、一八年にわたる国会の厳しい状況、具体的に言えば、平和国家日本から戦争国家日本になることが避けられないことが私の講演を通して認識され、その方が事柄の重要性を知って下さり、友人・知人に訴え、私の講演となっているように思われる。

それでは、今日の厳しい日本の状況とはどんな内容なのか。私の認識は、常に歴史の事実に基づく歴史認識の共有となり、具体的に運動の結集となり、日本の政治状況を根本的に日本国憲法「前文」、第九九条の他、個の尊厳にかかわる日本国憲法の習熟という私たち自身の日本国憲法の徹底学習の必要についてのひとりびとりの課題となり、運動となることである。

2

以上の歴史認識の共有が私たちの緊急課題であり、ひとりびとりがその意味を認識して下さり、実践して下さることが二〇一八年の今日の主権者・有権者のなすべき責任課題であると私は信じている。

次の私の一文の内容を参考に考え、学びを深めて下さることを私は強く願

っていることを重ねて申し上げておきたい。以下の通りである。

アジアは日本の侵略・加害の事実を忘れていないことである。安倍首相を始め閣僚の現状と為政者の具体的責任課題を私たちが主権者・有権者として真剣に訴え続けることである。内容は言うまでもなく、日本はアジアに対して何をしたのかを正確に知り訴えることの責任である。

たとえば、「昭和天皇」は敗戦必至なのになぜ戦争を早く止めようとせず継続しようと考えていたのか。なぜポツダム宣言(一九四五・七・二六発表)を直ちに受け入れようとしなかったのか。なぜ鈴木首相はポツダム宣言を黙殺したのか。なぜ戦争継続の談話を発表したのか(七月二八日)。その直後アメリカは広島・長崎に原爆投下したことから、戦後の今日に至るまで毎年深刻な問題になっているのはなぜか。アメリカの責任も無視できないが、原爆投下を許した背景に、「昭和天皇」を始め権力者たちの消すことのできない敗戦を知らながら侵略・加害の歴史を率直に認めようとしなかったのはなぜか。今も心からの反省をしない国家権力者の責任課題の重大さは言葉に表わせないはずである。「ノー・モア・ヒロシマズ！」(ヒロシマ問題を二度とくり返してはいけないはずである)。

御前会議を開き、ポツダム宣言を最終決定し、天皇が戦争終結の詔書を公にした八月一四日、一五日敗戦の日に至る間にもどれほどのぎせい者が生じたのか。アジアの国にいた日本人も多くのぎせい者がおられたことを私たちは忘れることができない。私自身の兄のことも報告しておきたい。一九四五年八月一五日、兄は下級兵士として、ビルマにいたが敗戦の日から日本兵はビルマの南部に行くこととなり、元気であった二四歳の兄は結果的に戦病死し、当時無事帰国すると信じていた母は泣きに泣いたことを忘れることはできない。戦病死という国の知らせに泣きに泣いた母も戦争のために戦没者の悲しみを味わったひとりとなったので

ある。元気だった兄は生前結婚を約束していた女性もおられたとのこと、二重の意味で心からの追悼(悼み・悲しみの思い)を余儀なくされた母であり、弟の私であったことを述べておきたい。

最後に二〇一八年の今日、私たち日本人として絶対に忘れてはならないことを述べておきたい。それは言うまでもないことだが、日本が行なった戦争は決して自衛戦争ではなくて、侵略・加害の日本であって、その最高の責任者は「昭和天皇」であったということである。本多公栄著『ぼくらの太平洋戦争』の著者は中学校の教師であった。本書は貴重な執筆者(生徒)だった人々の文章であり、率直に書かれており、私にとっても貴重な書物の一冊であるだけでなく、多くの人々にも読んで欲しいと願っている。その一人の一文を報告しておきたい。

「天皇は、戦争の最高責任者です。しかし天皇は今だにのうのうとくらしています。……私は天皇制を廃止することを望んでいます。なぜならば天皇は戦争の責任を日本人に対してアジアの人々、そして、全世界の人々に対してあやまっていないのです。……」(一四九頁)。

川原敏明著『天皇裕仁の昭和史』(文春文庫) 「天皇の戦争責任について、国民は誰しも、内心では『ある』と認めながら、あえて追求しようとせず、暗黙のうちに看過している……」(四五四頁)。

『沖繩と天皇』(あけぼの出版) 第一章 沖繩をアメリカに売り渡した天皇 第二章 沖繩を“すて石”にした天皇……

最後に、憲法改正(改悪)必至、戦争法案を徹夜で強行採決した国会に対して、根本的に反対意見の立場で執筆した、私の『わたしたちの憲法 前文から第103条まで』(一二〇〇円、いのちのことば社在庫)の必読を勧めて、終わります。